

## 稲盛和夫と潜在意識論

吉田 健一（鹿児島大学 稲盛アカデミー・准教授）

### Inamori Kazuo And Subconscious

YOSHIDA Kenichi

---

キーワード：心の多重構造、唯識思想、顕在意識、潜在意識、真我

はじめに

1. 稲盛フィロソフィにおける「宇宙の意志」と調和する心
2. 稲盛フィロソフィにおける潜在意識の重要性
3. 稲盛和夫の示す心の多重構造
  - 3-1：稲盛の示す心の多重構造
  - 3-2：唯識思想による心の多層構造
  - 3-3：稲盛の示す「感情」と感情の分類の例
4. 顕在意識・潜在意識・真我

おわりに

はじめに

稲盛和夫はその著作において、どの経営者よりも潜在意識の重要性を説くことで有名である。稲盛の著作では、ほぼ全ての中で潜在意識の重要性が説かれているといっても過言ではない。自伝や社会への提言についての本以外のほぼ全ての稲盛の著作では潜在意識の重要性について言及されているくらいである。

本稿では稲盛の潜在意識についての考え方を考察する。稲盛は心の重要性を誰よりも説く経営者であるが、願望達成のために潜在意識の重要性を説くとともに人間の心についても言及することが多い。また、稲盛は自分自身で極めてオリジナルな「心観」ともいえる心の多重構造についての説を発表している。その稲盛の「心観」は極めてオリジナリティのあるものであり、実際のところ決して学問的なものとはいえない。これは稲盛なりに長く考えて到達したものなのではあろうが、いくばくの視点かから疑問を呈さざるを得ない部分もある。また、稲盛の示す人間の心の多重構造についての見解はこれまでの宗教による心の多重構造についての説明とも異なるものである。

本稿では主に稲盛の考える心の多重構造についての考え方と潜在意識論について考察したい。本稿の構成は次の通りである。まず第1章においては稲盛が『京セラフィロソフィ』の中で説いている人間の心と宇宙意識との関係性について考察する。次に第2章では稲盛がいかにか潜在意識を

重視しているかを数多くの稲盛の著書から確認する。

第3章では第1節で稲盛和夫の示す心の多重構造についての考え方を紹介した上でその内容について検討する。第2節で仏教の唯識思想を紹介し古来、仏教の唯識思想では人間の心の構造をどのように考えてきたかを検討したい。また第3節では稲盛が最も低次元な自我だと位置づける人間の「感情」について検討する。その際、稲盛のいう感情観をそのまま紹介し稲盛のいわんとするところを理解するだけでなく、これまでの心理学が「感情」をどのように捉えてきたかという視点からも含めて批判的に検討したい。

そして第4章では稲盛が人生や経営について最も重視する潜在意識について顕在意識と潜在意識についての考え方を検討したい。そして、第4章の最後では最も言葉で説明することの困難な概念である「真我」とは何かという問題についても言及したい。

## 1. 稲盛フィロソフィにおける「宇宙の意志」と調和する心

心の重要性について説く稲盛はしばしば潜在意識の重要性について説くが、まずその前段階として人間と宇宙の関係について説いている。本章ではまず稲盛が人間存在というものをどのようにとらえているのか、人間と宇宙の関係をどのようにとらえているのかを代表的著作、『京セラフィロソフィ』（稲盛、2014年、サンマーク出版）の中の記述から見ていきたい。

稲盛は「この世には、全てのものを進化発展させていく流れがあります。これは『宇宙の意志』ともいうべきものです。この『宇宙の意志』は、愛と誠と調和に満ち満ちています。そして私たち一人一人の思いが発するエネルギーと、この『宇宙の意志』とが同調するのか、反発しあうのかによってその人の運命が決まってきます」（稲盛、2014年、49頁）と述べ、まず宇宙には意志があり、その宇宙の意志は人間一人一人のもつ思いが発するエネルギーと同調したり反発したりしていると述べる。

この宇宙という概念は宗教的な響きを伴うが、この言葉について稲盛は特段、儒学でいうところの天のような概念なのかキリスト教でいう神なのかというような説明はしてはいない。よく論者によってはサムシンググレート<sup>1</sup>という言い方をする人もいるが、稲盛がここでいう「宇宙の意志」も特定の宗教の概念をそのまま取ってきているものではないようである。

そして、稲盛は「宇宙の流れと同調し、調和をするようなきれいな心で描く美しい思いをもつことによって、運命も明るくひらけていくのです」（同、49頁）と宇宙には流れがあり、その流れと同調することと個々人の人生の運命との関連を説く。

また宇宙の意志がどういうものかについては、「宇宙に流れている意志とは、すべてのものを慈

<sup>1</sup> この言葉は「神」という言葉を使用することには抵抗感はあるが「神」としかいいようのない何者かを説明する時に使う人が多い。例えば分子生物学者の村上和雄もこの言葉を多用した。村上自身は天理教の信者であったが、よく「サムシンググレート」という言葉を使った。「神」という言葉を使うと宗教色がついてしまうので、それは避けたいが、特定の宗教色をつけず超越的な何者かの存在を信じているという立場の人がこの言葉を使う傾向があるようである。しかし、実際に「サムシンググレート」を信じている人は本心では何らかの意味で「神」というべきものを信じている人が多いとも考えられる。

しみ、すべてのものを愛し、すべてのものを良くしてあげたい、という思いであり、自分だけが良くなろうという意志の対極にあるものです。この宇宙に存在する森羅万象あらゆるものを一方的に良くしてあげたいという愛の流れと調和する、同調する心をわれわれが持っていなければならないのです」(同、54頁)と述べる。

ここで重要なことは「調和」や「同調」というキーワードである。稲盛はそもそも宇宙には人間をはじめとする森羅万象に対しては、良くしてやろうという意志が働いているのだが、その意志と調和して同調できるのかは、人間の側の心によるのだとする。同調するためには、「愛に満ちた心」を持つ必要があるのだが、このことについては、稲盛も簡単ではないと考えており、「そこで難しいのは、『どうすれば愛に満ちた心を持てるか』ということです。実際には、私自身も含めて、もてやしないのです。持てないけれども、『持とう』と思うことが大事なのです」(同、56頁)と述べている。

そして、人を仕事や人生において成功に導くものについて、「人生においても仕事においても素晴らしい結果を生み出すためには、ものの考え方、心のあり方が決定的な役割を果たします。人を成功に導くものは、愛と誠と調和をという言葉であわらされる心です」(同、58頁)と述べ、我々が宇宙の意志と調和するためには、自分自身が愛と誠と調和というものを意識しなければならないとする。

さらに、稲盛は人間という存在を肉体と魂から成り立っているという自身の考え方について「あなたという存在は、肉体だけを表すのではなく、心というものがそこにあるはずで。その心でいろいろなことを考え、いろいろな思いを巡らせるわけですが、では、その思いの出てくる大本は何だろうと問い詰めていきますと、『魂』という霊性を帯びたものがあるのではないかと、ということに思い当たります」(同、59頁)と説く。

この考え方自体は、稲盛のオリジナルなものというよりは多くの宗教で説くところでもある。ここで『京セラフィロソフィ』の中に『魂』という霊性を帯びたもの」という言葉がでてくるが、この言葉は稲盛の思想を語る上ではどうしても避けることのできない言葉である。経営哲学についてのみを解説する書物であれば、多くはこのような経営者個人の宗教観やそこから導き出される人間観、そしてさらにそこから導き出される経営観というものには、さほど触れられないのが一般的な傾向であるが、本稿ではこの稲盛を語る上で欠かすことのできない部分についても言及し解説をほどこしていきたい。

稲盛はまず宇宙に意志があり、宇宙の意志と調和できるかどうかが個々人の人生が成功に導かれるかどうかを分けるとする。そして、さらに宇宙と調和できる人の心のありようを説明し、さらに人間は肉体と魂から成り立っている存在であるとする。そして、人間の本質については、「このように、人間の本質、根源についてはさまざまな表現があるわけですが、その本質とは『愛』と『誠』と『調和』の三つの言葉で表されるものなのです」(同、59頁)として、本来の人間は「愛」、「誠」、「調和」というものを本質的に内在しているものだとする。

しかし、現実の人間は内在しているはずのその本質をいつもは発揮することはできない。この理

由として稲盛は「もともと人間の本质とは、愛と誠と調和に満ちた美しいものであるはずなのですが、魂が肉体をまとっていますから、最初は肉体が発する欲望が出てきてしまうのです。勇気を持ってこの魂の外側を覆っている欲望を少しでも抑え、自分の本質である愛と誠と調和に満ちた魂が出てくるようにしなければなりません」(同、61頁)と述べる。ここは重要な部分であり、人間が肉体と魂(霊性)から成り立っているというのが稲盛の基本的な人間観であるが、稲盛は人間は肉体を持つ存在であるがゆえに、本来、人間が内在している良き本質を発揮することがなかなか難しいと考えている。

また、実人生で成功するために願望というもののもつ力の重要性を強く説く稲盛であるが、願望にはきれいな心で描く願望とそうではない心で描く願望があるとしている。このことについては、「きれいな心で描く願望でなければ、すばらしい成功は望めません。強い願望であっても、それが私利私欲に端を発したものであるならば一時的には成功をもたらすかもしれませんが、その成功は長続きしません」(同、61頁)と述べている。私利私欲から発した願望でも実現しないわけではないが、長期的に人生や仕事を成功に導くものは、美しい心から発した願望であり、願望が発する前の心のあり様によって結果は変わってくると説く。

そして、次の段階として、潜在意識の重要性が説かれる。このことについては、稲盛は「成功を持続させるには、描く願望や情熱がきれいなものでなければなりません。つまり、潜在意識に浸透させていく願望の質が問題となるわけです。そして、純粋な願望をもって、ひたすら努力を続けることによって、その願望は必ず実現できるのです」(同、62頁)と説き、願望の中身そのものがどういう心から発したものが問題となると述べる。

稲盛がいかに潜在意識を人生と仕事の成功において重要視しているのかについては、次の章で見ていくが、本章でまず確認しておきたいのは、潜在意識は重要であるからこそ、まず何かを望む場合にその願望が正しいものかどうかの問題にされるということである。

また稲盛はしばしば心で思ったことは必ず実人生で実現すると述べているのだが、その時間軸については、かなり長くかかるものだとしており、「実際に人生や経営は、心に思ったことと寸分違わず現れてきます。ただ、スパンが長いわけです。だいたい三十年くらいのスパンで見ると帳尻が合うはずです」(同、63頁)と述べている。

この部分については、さらに稲盛は今世において結果が出てこない時は来世にも持ち越されるとしているのだが<sup>2</sup>、とりあえずは対象とする時間を今世(この今の人生)と限定しても、心に思ったことは、現実に現れてくるが、それにはかなりの時間を要するというを説いている。そして、再度、潜在意識は重要であるからこそ、「きれいな思いでなくても、願望は実現します。人を

<sup>2</sup> 例えば『京セラフィロソフィ』(63頁-65頁)の中には1920年頃、イギリスのロンドンでスピリチュアルなもの信じている人たちの交霊会にシルバー・パーチというネイティブ・アメリカンの霊魂が出てきた話が引用された上で、稲盛自身が霊魂の存在を信じている前提で「つまり、肉体を持って生きている現世だけで考えるのではなく、あの世まで通算してみれば、ものの見事に、因果応報は成立しているというのです」とある。稲盛が魂の存在や魂が輪廻転生していること、過去世や来世というものの存在を信じていることは他の書籍でも確認できる。

やっつけてでも、同業者の足を引っ張ってでも、自分の会社を立派にしたいと強く思い、誰にも負けないよう努力すれば、会社は大きくなります。(中略)しかし、それは決して長続きしません。長いスパンで見れば、その成功は持続するものではないのです」(同、65頁)と説く。

以上、本章ではまず稲盛の基本的な人間観と宇宙観を確認した。稲盛は宇宙には意志があり、宇宙の意志と個々の人間とはつながっていると考えており、人生において成功する人は宇宙の意志と調和していること、そして、宇宙の意志と調和するためには人間の側の心のあり様が問われてくると考えていることを確認した。また、実人生の成功においては、願望の持つ力が重要ではあるのだが、成功にも長期的な成功と短期的な成功があり、稲盛は長期的な成功を取めるためには、その願望の内容自体が「美しい心」から発するものでなければならないと考えていることを確認しておきたい。

## 2. 稲盛フィロソフィにおける潜在意識の重要性

本章では稲盛がどれほどまでに潜在意識というものを重視しているかということを確認していきたい。稲盛が仕事や人生の成功において潜在意識を活用することの重要性を説いていることはよく知られていることであるが、このことは他の経営者と稲盛とを分ける決定的な違いといえるかもしれない。まず稲盛の著書から潜在意識について言及されている部分を確認していこう。子ども用に書かれている『君の思いは必ず実現する』においても稲盛は「一生懸命に努力すれば必ず夢は実現する、つまり、人生は心に描いたとおりになる、そう考えて、わたしは今日まで生きてきました」(『君の思いは必ず実現する』、財界研究所、2004年、4頁)と述べている。

また、稲盛の代表的な著作と見なされており、最も世に普及している『生き方』の中では「ただし願望を成就につなげるためには、並みに思ったのではダメです。『すさまじく思う』ことが大切。漠然と『そうできればいいな』と思う生半可なレベルではなく、強烈な願望として、寝ても覚めても四六時中そのことを思い続け、考え抜く。…切れば血の代わりに『思い』が流れる。それほどまでひたむきに、強く一筋に思うこと。そのことが、物事を成就させる原動力となるのです」(『生き方』、サンマーク出版、2004年、42-43頁)と説かれている。ここには「すさまじく」、「強烈」、「寝ても覚めても」という言葉が登場する。

また京セラの社内向けのテキストである『経営12カ条』においては「強烈に思い続けていくというのは、潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望です。特に『強く持続する』ということが大事です。これは寝ても覚めても思い続けるということです」(『京セラ経営12カ条』、京セラ株式会社 環境・教育本部 教育企画部、2005年、46頁)との記述がある。『生き方』に出てくる表現とほぼ同じであるが、「潜在意識に透徹」するまで強く持続した願望を持つことの重要性が説かれている。

西郷隆盛の『南洲翁遺訓』を逐条解説した稲盛におけるリーダー論ともいえる『人生の王道』の中においてさえも「どんなことでも、まず『思う』ことからすべてが始まるのです。『そうありたい』、『こうなりたい』という目標を高く掲げて強く思う。それも、潜在意識に浸透するほど強く持

続した願望でなければなりません。寝ても覚めても途切れることのないくらい、強いものであってはじめて、先人の教えを実践の場で生かすことができるのです」(『人生の王道』、日経 BP 社、2007 年、211 頁) との言葉が出てくる。

『人生の王道』という本自体はリーダーのあり方について、稲盛が西郷隆盛の『遺訓』と解説しながら自身の考え方を述べている本である。元々、西郷の『遺訓』には潜在意識の重要性や「強く願望を持つことの重要性」などは一切、説かれていない。西郷は願望とか希望ということについても一切、述べていない。西郷は志を固めるには何度も厳しい経験をすることが必要だということには述べている。それにも関わらず、この本においてすら、稲盛は自身の信念である潜在意識の重要性に言及している。これはいさかか我田引水的だと感じざるを得ないくらいである。

また主として若年層向けに書かれたと思われる『働き方』の中には「漠然と思うのではなく、『何がなんでもこうありたい』『必ずこうでなくてはならない』といって、強い思いに裏打ちされた願望、夢でなければならないのです。寝食を忘れるほどに強く思い続け、一日中、そのことばかりをひたすら繰り返し考え続けていると、その思いは次第に『潜在意識』にまで浸透していきます。『潜在意識』とは、自覚されないまま、その人の奥深くに潜んでいるような意識のことです」(『働き方』、三笠書房、2009 年、83 頁) との記述がある。

『働き方』の中では稲盛が若い時に就職してから最初の会社である松風工業を経営状態や待遇の悪さから早く辞めたいと思っていたところ、ある事情から転職すらもかなわなくなり、一転して気持ち切り替えて与えられた仕事に専念し始めたところから、徐々に仕事が面白くなり良い結果が出せるようになってきたことが述べられている。この本は主として若年層に人生における仕事の重要性や働くことの意義を説いた本であるが、この本でも潜在意識の重要性が説かれている。

そして、稲盛のフィロソフィの集大成である『京セラフィロソフィ』には「純粋で強い願望を、寝ても覚めても、繰り返し繰り返し考え抜くことによって、それは潜在意識にまでしみ通っていくのです。このような状態になったときには、日頃頭で考えている自分とは別に、寝ているときでも潜在意識が働いて強烈な力を発揮し、その願望を実現する方向へと向かわせてくれるのです」(『京セラフィロソフィ』、サンマーク出版、2014 年、240 頁) とある。

本によって多少の表現の違いこそあるものの、何度も本にも出てくる言葉を挙げてみると「透徹」、「すさまじく」、「強く持続」、「寝ても覚めても」、「繰り返し繰り返し」といったものである。稲盛によれば、人生において思いは実現するのだが、そのためには、その思いは強く持続したものでなければならないということである。まずここで「強さ」という強弱の問題と「持続」という時間軸の問題がでてくる。稲盛はこれを両方、満たした「思い」でなければ成就しないとする。

つまり「弱く」、「短い」思いは論外なのだとしても「強く」ても「短い」ものでは願望は実現せず、また例え「持続」したものであっても「弱い」ものならなかなか願望は実現しないということである。ではなぜ、ここまで稲盛は潜在意識の重要性を説くのだろうか。他の経営者でも事業において強い思いを持つこと自体の重要性を説くものはいても、ここまでこのことを強調する人物はいない。考えられることは、稲盛自身が強烈な強く持続した願望によって現実の人生を切り開いてき

たからであろう。

では、強く持続した願望、潜在意識にまで透徹するほどの願望を持てば、なぜ、実人生において願望が実現するのであろうか。実はこここそが重要な問題である。なぜならば、いくら強い持続した願望を強烈に抱いても実人生の上でその願望が実現されないのであれば、稲盛のいうことは説得力を欠くことになるからである。この点、稲盛はなぜ、潜在意識に透徹するまでの持続した願望を持てば実人生においてそれが現実化するのかのメカニズムについては、多くの例を挙げて懇切丁寧に説明しているわけではない。だが、それでもいくつかの実例は語られている。

そのうちの一つは第二電電を始めようとしていた時のことである。『経営 12 カ条』の中で稲盛は、1984（昭和 59）年に第二電電を設立した時のことを振り返って、当時の電電公社の関西支社にいた技術者の千本倅生氏との出会いについて述べている（稲盛、2005 年、53 頁-56 頁）。そのエピソードの中では、京都商工会議所で主催した講演会に来た千本氏が「電気通信の自由化」という題で通信技術についての講演をした時、講演が終わった後に別室で稲盛が千本氏に謝礼を渡した時にした話の内容が紹介されている。稲盛はこの時、千本氏を新事業に誘い、実際に千本氏はその後、稲盛の設立する新しい会社に参加することとなったのである。千本氏は電電公社に勤めながらも、電電公社が民営化されて NTT になり、通信産業への参入が自由化された後には、もう一つ民間に NTT のライバル企業ができる必要性を感じていたのであった。

そして、この例を紹介した後に稲盛は「この例でもわかるように、成功するには強烈な願望を心に抱くことが大切なのです。潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望を持ち続けているから、そういうチャンスにも恵まれるのです」（稲盛、2005 年、56 頁）と述べている。ここはとても大事な部分である。現実の人生の状況が変わってくる理由は、潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望を持つとその人の自身の行動が変化するだけではなく、日々、その人が受け取る情報の質が変わってくるからであろう。

このことは、このことを実際に自分で経験したことのある人になら理解できることであるが、経験したことのない人にはなかなか言葉では伝えにくい部分であろう。だが、潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望を持ち続けていると、人間はその問題に関連する情報が自分の頭上を通った時に反応できるようになる。逆にその願望が弱いものや持続したものではない場合には、本来は重要な情報が自分の頭上を通過しているにも関わらず気づくことが出来ない、反応することができないということになってしまう。このことを稲盛は読者に伝えたいのであろう。

潜在意識の重要性を説く稲盛であるが、なぜ、そこまで強く持続した願望を潜在意識に透徹させることの重要性を説くのだろうか。それは、そこまですることによってその人の行動が実際に変わり、そのことによって集まってくる情報や反応できる情報が変わってくるからであろう。このことは現実にもそのことが起きている人には分かることであっても、傍目から見ると、その人がただ運の良いだけの人物に見えてしまうので注意が必要である。傍目から見て幸運な人というものは実際の人間社会に存在するものであるが、そういう人が幸運な出会いやその出会いによってまた一層、仕事の恵まれていく流れに乗れるのは、実は心で起きていることと実人生で起きることに因果関係があるか

と考えることは可能である。

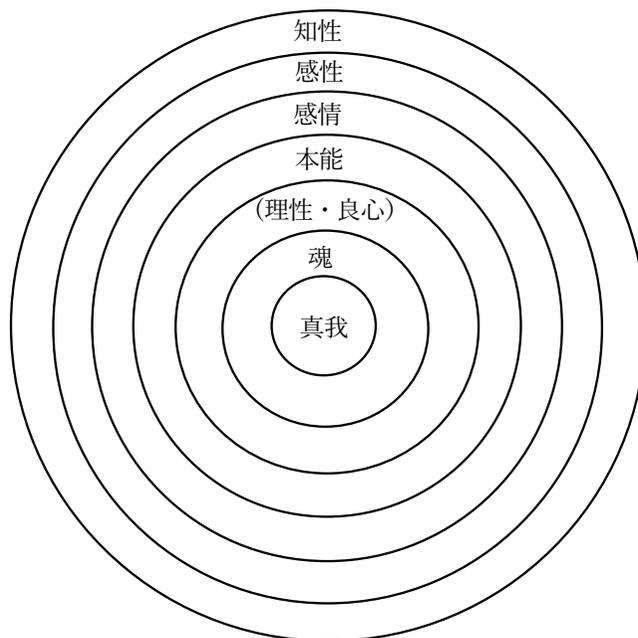
稲盛は潜在意識を活用することの重要性は強く説くが、それ以降のプロセスについてはそこまで多くのことを語ってはいない。だが、稲盛は潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望を持つということと現実の人生においてその人に道が次々に開けてくるということの間には、目には見えないものの明確な因果関係が働いてもいるということを実感しているからこそ、このことの重要性を長年にわたり力説してきたということは理解しておかなければならないであろう。

### 3. 稲盛和夫の示す心の多重構造

#### 3-1：稲盛の示す心の多重構造

稲盛は自ら人間の心というものが重層的なものだと考えており、その多重構造を示している。ここでまず、それを紹介したい。そして、なぜ、稲盛がこのような人間のもつ心の多重構造について説いているのかの理由を検討したい。この「心の多重構造」観はいくつかの本の中に出てくる。

2004年に刊行された『生き方』では知性、感性、本能、魂、真我の5つの層だとしているが（『生き方』、232頁）、後から2005年に刊行されている『経営12カ条』では7重構造になっている。後から7重を5重にとシンプルにしたのであれば、そちらを検討した方が良いが、どうやら後の方が7重にしているようなので、ここでは『京セラ経営12カ条』から見ていく。稲盛は人間の心の層を7つにも分けて考えている。



出典：稲盛和夫『京セラ経営12カ条』（京セラ株式会社、2005年）182頁を参考に作成。

円の中心から順に稲盛は真我、魂、理性・良心、本能、感情、感性、知性としている（稲盛、2005年、182頁）。この図は稲盛の中ではある程度の時間を経てたどり着いた考え方のようにあり、時期によって多少の違いがある。だが、最終的には稲盛の考える心の多重構造はこの7層になっている。本節ではこの稲盛の「心の多重構造」観の妥当性を検討したい。稲盛は中心（内側）ほどより人間の本質的なもの、表面（外側）ほど、表層的なものと考えている。ちなみに5層が7層になっているのは、5層の「本能」と「魂」の間に「理性・良心」が足されて、「本能」と「感性」の間に「感情」が足されていることによる。

そして、稲盛は表層的な部分ほど、幼稚なもので衰えるのも先だと考えている。ここについて、まず稲盛の説明を引用してみよう。稲盛は「胎児の肉体が出来てくるその時に、どこにあるかは知りませんが、魂と一緒に出てくると私は思っています。さらに脳細胞の発達に伴って、本能の次に感情が、その次に感性が、さらに知性が発達すると考えています」（同、183頁）として、人間に魂の存在を認めている。

これは人間の最も本質的なものとして想定されるものの存在である。この「魂」が靈魂を指しているのかどうかまではこの稲盛自身の表現では理解できないが、人間の個々人が持っている最も本質的なその人自身の中核にあるものとして「魂」を想定していることは確かであろう。だが稲盛は「魂」を人間の中核とはせずにさらにその核にはさらに「真我」があるとしている。

次に「最初に本能が機能することによって、生命を維持しているのです。次に、お腹が空けば泣くというように、感情が芽生えます」（同、183頁）として、本能の延長線上に感情の存在を位置付けている。

そして、稲盛は次に発達するものとして「3歳から小学生ぐらいの間には、前頭葉がどんどん発達して知性が出てきます」（同、183頁）と知性の存在を挙げている。また、稲盛は人間の心の中心にあるものとして「そういう過程を経て発達してできあがった心は多重構造をしており、中心に真我を核とした『魂』があり、その上に『本能』があります。本能は我々の生命を維持するための機能として備わっているものです」（同、183頁）としている。稲盛は中心から順に本質的なものから表層的なものを真我→魂→本能→感情としている。

そして、本能と感情の関係については「さらに本能は『感情』に包まれています。感情は、腹が立ったり、怒ったり、自分さえよければよいと思ったりする身勝手な心で、私はこれを低次元の自我と言っています。これは、仏教でいえば煩惱です。煩惱の中でも三つの大きな煩惱があると言われていますが、それは貪欲、怒り、愚痴です。このような感情が低次元の自我です」（同、184頁）と述べる。

そして、次が一番、理解しにくい部分であるが、稲盛は感情と感性を別のものとして考えており、感情と感性の関係を「さらには感情の表面は『感性』に包まれています。感性とは、見る、聞く、触る、味わう、嗅ぐといった五感のことです」（同、184頁）としている。そして、最も表層的なものとして、「心の一番外側には、『知性』があります。子供が成長するに従い、前頭葉が発達し、知性がどんどん発達してきます。人間の生まれてからの成長の過程を『心の多重構造』で説明

すると、このようになります」(同、184頁)と知性を挙げている。

稲盛は真ん中(中心)にあるものほど程度が高く本質的なものであると考えているので、これを衰えてくる順番でも理解できるとして「老人になると、最初に一番外側にある知性が失われていきます。例えば、大学で難しい研究をされてきた方が、ほんとうに大学の先生だったのかと思うほどボケてしまったりするのは、知性が消えてしまうからです。知性が消えると感情がむき出しになってきます」(同、184頁)と述べている。

さらに稲盛は人間の衰えてくる順番を「さらに感情も消えてしまうと、本能だけになり、呼吸するだけの植物人間のような状態になります。さらに、この本能の部分の機能まで失われると死を迎えるのです」(同、184頁)と人間の心の構造のうち表面的なものから先に衰えるという自身の考え方を披露している。

稲盛は本能と感情については「本能や感情を私は低次元の自我と言っています。低次元の自我とは、すべてものごとを自分のいいように考える、身勝手な自我です。しかし、自分を守ろうとしなければ、生きていくことはできないので、こういう自我があることは必要なのです」(同、185頁)と本能と感情をほぼ同じ意味合いで使っている。

そして、より本質的かつ人間の中心にあるものについては「しかし、我々の心の中にある真我というのは、本来、美しい思いやりの心なのです。人間は真善美を求めると言いますが、この真我という魂の中心にあるもの、つまり存在を存在たらしめているものは、真善美という言葉で表せる美しいもの、また、愛と誠と調和に満ちたものなのです」(同、185頁)としている。

また稲盛は同じ人間でも意識次第で「つまり、身勝手な自我、わがままな自我、自分さえよければいいという自我で生きてきた人が、『ちょっと待てよ』と自分で反省した瞬間に、この愛と誠と調和に満ちた真我から、理性や良心という形で吹き出してくるのです」(同、186頁)と人間は反省することによって、真我が発動して、身勝手な自我に対して理性や良心が出て来るとする。

次に稲盛は「知性で低次元の自我を戒めていくと、感情や本能に隙間が空いてきますから理性や良心が出てきやすくなってきます。つねに美しい精神状態でいられるようにするためには、低次元の自我、身勝手な自我である本能や感情がなるべく出ないように訓練する必要があります」(同、186頁)と人間の努力の必要性も説いている。

そして「純粋な思いやりの心は、簡単に持てるものではありませんが、感情、本能という、わがままな自我、自分だけ良ければいいという自我を抑え、思いやりの心を持たなければならないと、毎日1回でもよいから思っていると、理性や良心が出やすくなってきます。したがって、優しい思いやりの心を持つと思うことは、心を美しくするためにも、必要なことなのです」(同、187頁)と稲盛は「自分だけ良ければいいという自我」を抑えて「優しい思いやりの心を持つと思うこと」の必要性を説く。

稲盛が結果的にどういうことを主張したいのかということは、最後の部分に凝縮されているので、これは容易に理解できる。表面的な人間のもつ「低次元の自我」を抑えると、人間が本来は持っている「美しい心」が出て来るのでその努力を意識的にしなくてはならないということである。

だが、ここに紹介した稲盛の「心の多重構造」観は非常に理解しにくい。この7重構造の「心の多重構造」観を説明されてすぐに理解できる人は、おそらく、ほぼいないだろう。そして、これはゆっくり慎重に検討したからといって理解できるものでもないと思われる。それは稲盛が深く考えており、一般の人の考えが浅いという理由からではない。むしろ深く考えれば考えるほどにこの稲盛の「心の多重構造」観には多くの疑問を呈さざるを得ない。

まず心を重層的なものと捉えるのだとしても7重構造は多すぎるのではないだろうか。7層構造が多すぎる理由は心の深さ（深層と表層）の問題と心の機能（考えることや見る、聞くなど人間の感覚器官のもつ能力）という別の問題を同時に同じ層の問題として論じているからである。稲盛はこの「心の多重構造」観の中では、本来、比較にならないものを同一平面上で比較している。

### 3-2：唯識思想による心の多層構造

なぜ、稲盛はこんな複雑な構造を考え出したのだろうか。その理由は稲盛が近代心理学の示す心観（知性、感情、意思の三要素）と仏教の示す心観（人間の精神活動及び知覚機能を機能別に分けたものと意識の深さについて論じたもの）を混在して考え出したからではないかと推測される。稲盛はそれぞれから得ていた知識を何となく合わせてオリジナルな構造を提示した可能性がある。仏教思想の中にある心の多重構造観には唯識思想があるが、稲盛は一部、唯識を意識しているのではないかと推測される。だが、稲盛は唯識思想を説明しているようでありながら、実際にはそうでもない。この7重にも及ぶ稲盛の「心の多重構造」観は全てが唯識で説明されているわけでもなく極めてオリジナルであり、稲盛らしさの現れた「心観」であるように思われる。特に稲盛らしさが出ているのは「知性」を一番、表面的で人間の心の中で程度の低いものだと考えている部分であるように思われる。

唯識思想について簡単に説明しておきたい。唯識とはそもそもは一般的に『西遊記』でも知られる玄奘三蔵によって説かれたものである。ここでは横山紘一『阿頼耶識の発見—よくわかる唯識入門—』（幻冬舎新書、2001年）を参照しながら記述を進める。唯識思想とは人間の心を表層から深層までを8つに分けたものであり、人間の一番、深いところにある意識を阿頼耶識とする（横山、2011年、3頁）。唯識思想における心の8つの層は眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識、阿頼耶識の8つである。唯識思想における八識はまず大きくは表層心と深層心の2つに分かれる。そして表層心の六識のうち前半の5つ（眼識から身識までの部分）が感覚である。そして、意識が思考である。ここで深層心がまた2つに分かれており、これが末那識と阿頼耶識である。末那識は自我執着心のことであり、阿頼耶識が根本心である（横山、2011年、74頁）。図に示すと次のようになる。

八識とは

眼識

耳識

鼻識

舌識

身識

ここまでが「前五識」と呼ばれるもので、これはそのまま視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚とって良い。

.....

意識

.....思考

ここまで「前五識」を含んで「六識」と呼ばれる。

.....

末那識

.....自我執着心

阿頼耶識

.....根本心

この2つが「無意識」に相当する。この2つを合わせて「深層心」とも呼ばれる。

.....

出典：横山紘一『阿頼耶識の発見—よくわかる唯識入門—』（幻冬舎新書、2011年）、74頁を参考に筆者が作成した。

唯識思想によれば深層心にも2つがあるが、末那識とは「『深層にはたらく自我執着心』。常に阿頼耶識を対象として、『自分』(我)と執する。表層心がエゴで汚れている原因は末那識である」(横山、同、76頁)とのことであり、阿頼耶識は「『深層に働く根本心』。一人一宇宙の中のすべての存在を生じさせる可能性を有していることから、その可能性を植物の種に喩えて『一切種子識』ともいう。眼識ないし末那識を生じさせる。身体を作りだし、それを生理的に維持している。自然をも作り出し、それを常に認識しつづけている」(横山、同、76頁)のことである。

また横山によれば、「眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識を『表層心』、末那識、阿頼耶識を『深層心』と表現したが、「唯識の説く『心』は空間的な大きさをもったものではないので、「表層心を『顕在心』、深層心を『潜在心』と表現した方が適切」とのことである(横山、同、76頁)。横山は「しかし、フロイトの深層心理学の影響で深層心と表層心という言い方が多く用いられるようになったので、この本ではこの表現を使用することにすると断っている。「表層心」と「深層心」というのは便宜上の言い方であるが、我々が意識できる心が「表層心」であり、意識できない心が「深層心」である。

つまり唯識思想においては人間の心は大きくは2つに分けられ、さらに表層心(顕在心)が5つの感覚器官によるもの(これが前五識)とそれに意識を足した6つに分けられ(ここまでは六識)、さらに深層心(潜在心)が末那識(自我心)と阿頼耶識(根本心)の2つに分けられる(全部で八識)といえ理解できるであろう。これは次のようなイメージとなる。前五識と意識には深さの違いはなく並び立っているイメージである。我々は絶えず見たり聞いたり匂いに反応しているがその瞬間、瞬間に意識も発動している。前五識があつて次に意識が発動するわけではない。これは同時に発動している。無意識は大きく見れば一つだが、これに深さがあり二段階ある。末那識と阿頼耶識である。意識と無意識の間には大きな段差がある。これは別の言い方をすれば、顕在意識と潜在意識である。

稲盛がどこまで唯識思想を意識した上で、自身の心の多重構造を考え出したのかはどこにも書いてないので正確には分からないのだが、7段階から成り立っている稲盛の心の多重構造を仮にここで唯識思想に当てはめれば、稲盛のいう「真我、魂、理性・良心」部分が阿頼耶識、「本能、感情」部分が末那識、「感性、知性」の部分が六識という風に当てはめることができるかもしれない。特に稲盛は感性を5つ挙げているので、これは唯識思想に当てはめれば六識から「意識」だけを抜いた前五識にほぼ当てはまる。

また近代的で今日、一般的に我々に広く受け入れられている近代心理学によれば、人間の精神活動を知性、感情、意思の3つの作用に分けて説明するが、この稲盛の7重構造の中には知性と感情はあるが意思は出てこない。『経営12ヵ条』においては、意志だけについて説かれた条文もあるが、「心の多重構造」観の中では人間の持つ意思というものは、うまく位置づけようがなかったのかもしれない。だが、これは非常に奇妙な感じがする。なぜ、奇妙なことになっているのか。それは稲盛のこの「多重構造」観では近代心理学における人間の心の作用のある部分も表面の部分に入れながら、多重構造の説明の部分では唯識論的な説明をしているからである。

また、人間存在の中心に「魂」というものが存在していることを実感として認める人は多く存在すると思われるが—これは特定の宗教の信仰を持っているか否かに関わらずである—、稲盛は「魂」と「真我」と2つの似た概念を別のものとして挙げている。稲盛にとっては「魂」と「真我」も似て非なる概念であるが、ここもこの通りに説明されてすぐに理解できる人は少ないだろう。稲盛においては人間の心の真の中心が真我であり、その一重、外に魂があって、そのもう一重外に理性・良心というものの存在が想定されている。

また、稲盛においては理性と良心はほぼ同じ意味合いで使われている。稲盛は通常、我々が日常に使う時には違った意味で使われている理性と良心をほぼ同じ意味合いで使っている。本来的には、真我と良心の方が似た概念ではないだろうか（この場合は真我の発動が個人ごとの良心になるという意味であるが）。稲盛は真我は万人共通だがなかなか感知できないもの、理性と良心は個々人のレベルで人が持っているものという意味で分けているのかもしれない。さらに混乱を招くのは感性と感情という言葉が同時に出来ることである。稲盛においては感性が外側（表層的な方）であり感情が一つ内側（より人間の本質的な方）に位置づけられているが、これも最初に言葉の定義を正確に行い、しかも、一般的に使われている意味合いで使わなければ、非常に分かりにくい部分である。

稲盛は自身の「心の多重構造」観の中で、感性や感情という言葉の意味も通常、我々が使う意味合いではない意味で使っている。稲盛は感性を「感性とは、見る、聞く、触る、味わう、嗅ぐといった五感」としているが、これは先に見たように唯識思想でいえば、表層心のうちの六識に当たるもののうち「意識」以外のものである（前五識）。六識とは「眼識」、「耳識」、「鼻識」、「舌識」、「身識」、「意識」の六つの表層心である（横山、2016年、55頁）。唯識では「意識」以外の5つの感覚器官で捉えられるものを前五識ともいうが、稲盛はこの唯識でいう「六識」からいわゆる意識以外のものを「感性」と名付けている。つまり、稲盛が「感性」と呼んでいるものは唯識思想でいえば前五識にそのまま対応しているのである。これは耳や鼻や目や舌や皮膚で捉えられる感覚的なものである。

だが、この唯識思想でいう前五識にあたるものを「感性」と表現するのはいかがなものだろうか。通常、我々は感性という言葉を使う時には、「感性が鋭い」とか「感性が鈍い」という使い方をします。感性とは物事を感じる感度の鋭さのことである。通常、感性という言葉は、日本語においては感覚器官による味覚や嗅覚や視覚や触覚を意味しない。だが、稲盛はここでは、感性を人間が元々持っている目や耳や鼻や舌や皮膚の持つ感じ取る力という意味でのみ使っており、外から二層目の心としている。このような表現は多くの人々に容易には理解されるものではないであろう。

### 3-3：稲盛の示す「感情」と感情の分類の例

さらにまたやや疑問を持たざるを得ないのは感情の定義である。稲盛は感情を「感情は、腹が立ったり、怒ったり、自分さえよければよいと思ったりする身勝手な心で、私はこれを低次元の自我と言っています」としているが、これは通常、我々が感情という言葉を使う時の意味合いからはか

なり外れたものである。稲盛によれば感情はそのままイコール「低次元の自我」とされている。だが、このような説明は極めて理解が困難な説明ではないだろうか。一般に我々は感情を「腹が立ったり、怒ったり、自分さえよければよいと思ったりする身勝手な心」という風には理解していない。感情の分類にも様々なものがあるが、通常、人間の感情とは「身勝手」、「悪」とされるもののみを指しているわけではない。

感情とは良いとか悪いということ以前に人間の心の中に湧き出る喜怒哀楽のを始めとする人間の情である。近代的な心理学といえば知性と意思と並ぶ人間の精神活動の3つのうちの一つである。一般に喜怒哀楽のうち喜びや楽しみやプラスの感情とされ怒りや悲しみの方をマイナスの感情とされるものの、喜怒哀楽の全てが感情であって、感情とは「低次元の自我」というのは偏った定義だと考えざるを得ない。稲盛の表現に対しては、そもそも「自我」は感情なのだろうかという根本的な疑問も出てくる。

感情には様々なものがあり、古来、様々な分類がなされてきた。代表的な感情の分け方だけでも以下のようなものがある。一般的な喜怒哀楽の4種類の感情に愛（いとしみ）と憎（にくしみ）を入れた6種類のもものが六情といわれるものがある。また古来から中国には五情という分類の仕方があり喜怒哀楽の4種類の怨（うらみ）を入れたものである。また別に中国には七情という分類の仕方もあり、これは喜怒哀に懼（おそれ）、愛（いとしみ）、悪（にくしみ）、欲を足したものである。七情の場合は喜怒哀楽の「楽」は感情から抜かれており、代わりに「懼」が入り、そこに「愛」、「悪」、「欲」が加わる。七情では「欲」も感情に入れているのが特徴的である。我々が一般的に実感として理解しやすいのは、喜怒哀楽の4つの感情に愛憎の2つを加えた六情または、喜怒哀楽に怨を加えた五情であろうか。

分け方は古来からいくつかの種類があるのだが、いずれにしても、これらの全てが感情であって、感情を「身勝手な心」であり「低次元の自我」とするのはあまりにも感情の一部分しか表していないとしかいいようがないし、感情の定義としてはあまりに不完全なものであろう。稲盛のいう感情である「身勝手な心」や「低次元の自我」は感情ではなく、私欲が基になっている心や自我である。ここで稲盛は「感情」を「低次元の自我」としているが、これは先に見た唯識思想でいえば、末那識にあたるもので無意識（深層意識）の中の低次元なものだと説明した方がより適切な説明となるだろう。

人を哀れむのも「感情」の一つある。『孟子』<sup>3</sup>にある惻隱の情も感情の一つであろうし、不正を見て怒るのも「感情」の一つである（『孟子』においてはこれを羞惡という）。このことから考えても感情を「低次元の自我」とすることは非常に一面的であるとしかいいない。そして、稲盛はわざわざ感性と感情を分けているのだが、感情と本能を同じ意味合いで使っている。これは、一旦、ゆっくり考えてから出て来るものか、考える前にいきなり出て来るものかという意味で人間の精神活動を分けた時に、考える前にいきなり出て来るものとして同じような側の精神活動として同じ側に

<sup>3</sup> 『孟子』によれば人間には惻隱、羞惡、辭讓、是非の四端というものが予め備わっておりこの四端が顕在化すると仁（惻隱）・義（羞惡）・礼（辭讓）・智（是非）となるとする。

位置づけているのからであろう。しかし、本能とは人間以外の動物にも与えられている、極めて動物的なものである。人間が選び取ることなく最初から与えられているものの中で最も原始的なものが本能であって、本能と感情とは実際にはまた別者である。

ここまでだけでもかなり稲盛の提示する「心の多重構造」観には疑問が多いのだが、なぜ、稲盛はこのこまで複雑で7重もの構造を考え出したのだろうか。この理由は、すでに述べたが、おそらくは近代的な心理学の知識の上に仏教の唯識思想を組み合わせて心の説明を試みたからではないかと推測される。先に述べたように稲盛は唯識思想を心の深部の部分の説明に援用して、表層的な意識を表側に位置づけてこの7重構造を考えたのではないかと推測される。唯識思想で説明をすれば、稲盛のいう「低次元の自我」などは末那識を指しているし、7層の内側の3つは阿頼耶識であり、より外側の部分は六識なのだが、本人はそのように唯識思想を参考にしたという説明はせずに自分のオリジナルな考え方として発表している以上、これは推測の域を出ない。

そして、稲盛は心の最も表層的で外側にある作用として知性を挙げているのだが、これには疑問を持たざるを得ない。なぜなら、人間の知性にも本当は様々な種類があるからである。将棋や囲碁の作戦を考えたりする時や数学や物理学の問題を考えたりする時にも、確かに知性を使うが、このような機械的な知的活動のみが人間の知性なのではない。「人類の知性」や「世界の知性」という言葉もあるように、社会のあり様な人類のあり様について考えるのも知性のなせる業である。例えば核兵器廃絶の方法を考える時、その時の「知性」には根底には「良心」や「正義感」の裏付けがある。この「正義感」がどこから出て来るかといえば、それは稲盛の言葉でいうところの「魂」や「真我」から出て来るのであって、「知性」と「良心」も本来、切っても切れるものではない。

先の唯識思想で説明をすれば阿頼耶識から発する意識と末那識から発する意識は別であり、人間の意識自体にも深い部分から来るものと浅い部分から出て来るものがある。唯識思想には稲盛のいう「知性」というものはなく、全て意識のレベルの深さと感覚器官の説明である。だが阿頼耶識は宇宙意識でもあるので、これは末那識よりもより根本的な意識である。稲盛は知性を独立させて、人間の心の一番、表層の部分に位置づけているが、唯識思想でいえば、この知性に影響を与える意識こそが表層心の「意識」なのか深層心でも浅い方にある末那識なのかより深い部分にある阿頼耶識なのかで変わってくる。

だが、稲盛が知性という人間の精神活動を考える時には、そのような意識はなされていないようである。したがってここで稲盛のいう「知性」は計算をする能力とか将棋や囲碁の作戦を立てる能力とかパズルを解く力のような意味に限定して使われているような感じがしなくもない。文学作品を書くのも文芸評論を書くのも国家の政治のあり様について考えるのも本来は知性のなせる業である。そして、そのような知性の活動の背景には一般的な言葉でいう理性や良心が存在する。したがって実際の人間の精神活動においては「知性」と「良心」や「真我」も切っても切れないのだが、稲盛の「心の多重構造」による最も表面にある知性とは、ある種の感情や理性、正義感などの裏付けのあるものではなく、極めて機械的でコンピューターの持っている能力のようなものを意味しているようである。

さらにこの7重にも及ぶ「心の多重構造」観が理解しにくいのは、人間の持つ機械的な知的部分（計算能力やパズルを解く能力や将棋の作戦を立てるような能力）といわゆる「精神活動」（思想を生み出したり世界を体系づける哲学を生み出す活動）を混在させた上で、表層的な外側にあるものから中心にあるものが本質的なものだという流れで説明しているからである。

さらにこの「心の多重構造」観をすっきりと理解すること困難なのは、稲盛は一方では顕在意識と潜在意識の問題を説いているにも関わらず、この「心の多重構造」観には一切、「意識」の問題が組み込まれていないからである。「心」といっても「意識」といっても、これは非常に難しいものであって、言葉で表現するにも限界があるものだが、稲盛は「心」の構造の問題と「意識」の問題を切り離して論じている。

考えようによっては、稲盛は「意識」に影響を及ぼすものとして、人間の本質的な部分である「魂」や「真我」を想定しているようであるが、そうであるならば人間の心の構造はまず3層程度として顕在意識、潜在意識、真我とした方が説明がしやすいだろう。心の多重構造について説くのであれば、素直に唯識思想を援用して阿頼耶識のレベルに意識を掘り下げていくこと重要性を説き、末那識レベルでとどまらないようにすることを説く方が本質的な心の解説になると思われる。

どうも稲盛は「意識」自体の深さのレベルに関わる問題、そして深層意識は宇宙とつながっているということの言いたいこと、中心部分を占めているにも関わらず、知性、感情、意思の3つに人間の精神活動分類する近代心理学での説明も混在させて説明しているように見受けられる。知性や感情という概念は近代心理学による人間の精神活動を3つに分類する考え方から取り、心の多重構造部分はおそらく唯識思想にヒントを得て考えたのではないかと推測される。だが、これは、よく考えれば考えるほど、同一平面上では位置づけようのないものを多層で説明しているといわざるを得ない。

#### 4. 顕在意識・潜在意識・真我

本章では潜在意識、顕在意識、真我というものの存在について稲盛がどのように説明しているかを確認しながら若干の考察を試みておきたい。先の章で見たように稲盛が真我という言葉を書籍の中で使うのは潜在意識、顕在意識と3つを並べて使っているのではなく、心の多重構造の話の中で5層か7層の心の中心という意味で使っている。だが、どうもこれだけだと真我というものは理解ができにくい。外側に知性があって内側ほど本質的な心であって、中核が真我だというのが稲盛の説明であるが、真我の存在については、知性から感性と内側に進む「心の多重構造」の中で中心に存在するものという考え方よりも「意識の多重（3層）構造」という考え方をした方が少しは理解がしやすいのではないだろうか。本章では、筆者のこの視点から独自に論じたい。

先の章で見たように稲盛は人生における潜在意識の重要性を強く説く。顕在意識と潜在意識の違いについて稲盛は、「みなさんが普段使っているのは、顕在意識です。私が今、大脳で一生懸命考えて、しゃべっているのも顕在意識です。潜在意識というものは、普段は意識にもあがってこない隠された意識のことです。顕在意識で寝ても覚めても思い続けることは、潜在意識にまで強く入っ

ていくといわれています」(稲盛、2005年、47頁)と一般的な説明をする。

そして、これはすでに先の章で何か所も引用をしたことと同じ内容であるが、顕在意識と潜在意識の関係を「そのような潜在意識に、来る日も来る日もあることを強く思い続けければ、潜在意識に入っていく度合いが強くなります。繰り返し強く潜在意識に入れ、その蓄積された思いは、われわれが目覚めているときの意識へ戻ってくるができるそうです」(同、47頁)と説明している。顕在意識と潜在意識については、我々も日常的に、少し自らの心を深く掘ってみれば、ある程度までは理解することができる。

しかし、稲盛がしばしば使う真我という言葉についてのみは、なかなか言葉にしては説明することの難しい概念である。そして、稲盛は著書の中で真我という言葉は使っているのだが、真我が何を指しているのかということは著書や講演の中で一切、説明をしていない。真我という言葉の出て来る部分を少し引用してみる。

稲盛は『経営12カ条』の中では、真我について「我々は通常、頭でものごとを考えているわけですが、我々の心には、魂があり、その中心に真我があります。その真我というのは、宇宙そのものと同じものであり、それが私たちの心の中心にあるといわれています」(同、50頁)と説いている。ここでは「頭でものごとを考えているわけですが」とも述べているのであるから、稲盛も文脈によっては「顕在意識」との対比で真我を想定しているとも読める。あるいは対比ではなく稲盛は「心の多重構造」の最も外側の知性を指して「頭でものごとを考えているわけですが」としているので、本来はその最も奥(深い部分)に真我があると想定しているのかも知れない。

また心を5重構造だと説いていた頃に刊行されている『生き方』(稲盛、2004年)の中には「ここで肝心なのは、心の中心部をなす『真我』と『魂』です。この二つはどう違うのか。真我はヨガなどでもいわれていますが、文字通り中核をなす心の芯、真実の意識のことです。仏教でいう『智慧』のことで、ここに至る、つまり悟りを開くと、宇宙の貫くすべての真理がわかる。仏や神の思いの投影、宇宙の意志のあらわれといってもよいものです。(中略)真我は仏性そのものであるがゆえにきわめて美しいものです。それは愛と誠と調和に満ち、真・善・美を兼ね備えている。人間は真・善・美にあこがれずにはいられない存在ですが、それは、心の真ん中にその真・善・美そのものを備えた、すばらしい真我があるからにほかなりません」(稲盛、2004年、234頁)と説明している。

稲盛は魂と真我を別のものと考えているのだが、魂については「そして、その真我を包み込むようにして取り巻いているのが、『魂』です。真我が一条まとわぬ純粋な裸身であるとすれば、魂はそれを覆う衣服に相当します。(中略)つまり魂とは、それが何度も生まれ変わる間に積み重ねてきた、善き思いも悪しき思いも、善き行いも悪しき行いもみんなひっくるめた、まさにわれわれが人間の『業』が含まれたもの。それが魂として真我という心の中核を取り巻いている。したがって真我が万人に共通のものであるのに比して、魂は人によって異なっているのです」(稲盛、同、234-235頁)としている。

このように真我という言葉は使われているのだが、その真我について稲盛は真我のことを「文字

通り中核をなす心の芯、真実の意識」や「ここに至る、つまり悟りを開くと、宇宙の貫くすべての真理がわかる。仏や神の思いの投影、宇宙の意志のあらわれ」というような極めて抽象的な説明しかしていない。この文章を読んで「文字通り中核をなす心の芯、真実の意識」や「宇宙の貫くすべての真理がわかる。仏や神の思いの投影、宇宙の意志のあらわれ」を実感として理解できる人はいないであろう。

また、このような表現をするのであれば、やはり真我を知性や感性を含めた7重にも及ぶ「心の多重構造」の中心としての説明ではなく、「意識できる意識」としての「顕在意識」（表層心というべきもの）、「意識できない意識」としての「潜在意識」（深層心というべきもの）という「意識の多重構造」（唯識思想による心の多層構造）の視点から真我の説明をする方がより相応しい説明の仕方ではないだろうか。通常は、この文章を読めば、そういうものがあるのか、もしかしたら、心の最深部にはそういうものが存在しているのかもしれないという程度の感想を抱く人がほとんどであろう。

先に見たように稲盛は『愛』と『誠』と『調和』、この三つは、私たちが持っている根源的なものだと思うのです。（中略）その思いが出てくる大本は何だろうと問い詰めていきますと、『魂』という霊性を帯びたものがあるのではないかと、ということに思い当たります」（稲盛『京セラフィロソフィ』、2014年、59頁）という表現を使っている。稲盛は『生き方』や『経営12ヵ条』では「魂」と「真我」も分けているが、この部分ではそこまでは分けていずに「魂」を問い詰めていって最後にたどり着くものとしている。この辺りは実際のところ稲盛も試行錯誤して、その都度、自身の見解を変えてきたのであろう。ここでは、稲盛においては、この「私たちが持っている根源的なもの」が真我を指しているのだと思われることを確認しておきたい。細かく説明していないのは、稲盛が言葉ではこれ以上、説明できないと考えているので、このような表現を取っているのだろう。

さらに先の章において本稿では、仏教の唯識思想について言及し心の多重構造について考察したが、人間の心の最深部にある真我は唯識思想という阿頼耶識と同じようなものであると考えられなくもない。だがこれは言葉で説明することが最も困難な概念でもある。唯識思想によれば、深層心すらも末那識と阿頼耶識の2つに分けられ、末那識は自我の執着する心なのであるが、これを顕在意識と潜在意識のうちの潜在意識にそのまま当てはまることは不適當だろう。なぜなら、潜在意識にも良い潜在意識と悪い潜在意識があるからである。末那識は自我に囚われている心だから潜在意識の中でも自我に囚われている心ということがいえるかもしれない。だが、稲盛においては、潜在意識の中にある内容そのものも問われるので、全てが自我に囚われているとも考えてはいない様子であるから単純に稲盛のいう潜在意識は唯識思想による心の多層構造では末那識にあたるといえば反論もあるだろう。

あるいは前の章で論じた顕在意識、潜在意識、真我の3段階は唯識思想に当てはまれば、顕在意識が表層心の六識の中の前五識を抜いた「意識」に相当するであり、我々が通常自分で「意識できる意識」を指しており、潜在意識が末那識で通常、我々が「意識できない意識」を指しており、

真我がさらに意識できない阿頼耶識で我々の根本心という風に考えられるかもしれない。ここで難しいのは、それでも潜在意識までは、まだ顕在意識によって何とか「意識できる意識」であるのに対して、真我（を阿頼耶識とするならば）だけは自身では通常、日常においては「意識できない意識」であることである。

本当は潜在意識も実際には「意識」できないことには違いがない。だが、潜在意識（無意識）の存在までは辛うじて我々がなんとか「意識」できるのは、自分の「意識」を深く掘り下げていくと、常日頃、「意識」していない少し深い「意識」に自分がとらわれていることまでは分かるからである。稲盛がいう潜在意識はこの2つ目の層の潜在意識である。だが、稲盛はその潜在意識の中に何を入れ込むのかという内容にこそこだわる。きれいな心で、願望で描くか「低次元の自我」に基づく願望を潜在意識に入れるかで現実にあられることと社会にその人間が社会に及ぼす影響が変わってくるからである。

真我については言葉で説明することが難しく、実際に経験しなければ分からないから稲盛も書籍で真我の説明を詳しく著述することを控えたのだろう。極めて抽象的な説明しかしていない。または言葉での説明は無理だと考えて、言葉による説明はせずにただ「真我というもの人間にはある」という程度のことしか話さなかったのかもしれない。稲盛自身が言葉で説明していないことを本稿で筆者が説明することは不適當なので、控えておくが、実は筆者自身はある経験から何となく真我の存在は理解している。少しだけこのことにふれておきたい。

これは13年以上前のある経験からなのだが、筆者はいわゆる内観をすることによって、一度、真我と言われるものを実際に体感したことがある。この時の体験は文字で記すことは極めて困難である。筆者は佐藤康之氏という人の主催する「心の学校アイジーエー」（以前は佐藤義塾と呼称していた）という団体の開いていた講座で内観の体験をした。内観というのは今では心理療法の一つとしても確立しているものなのだが、元々は浄土真宗の「身調べ」という修養であったともいう。自分の心を自分自身で深く掘っていくのだが、ある親しい人や自分と葛藤のあった家族などと自分が一人二役（自分とその相手）で対話をしながら紙に自分がその人にしてあげたことやしてもらったことを思い出しながら、自分の心を掘っていくのである。

内観にもいろいろな種類ものがあるので、筆者の経験した内観以外にも別のやり方もあるのだろうとは思われる。筆者の場合には自分が死ぬ瞬間から自分の人生を振り返るといいう想定で家族（友人でもない）を相手にその人とこれ以上はないといいうところまで対話を繰り返していくという作業をした。大体、一晚中くらいの時間をかけたように思う。そして、最後にこれ以上はもう対話がないといいうところまで相手と自分の対話を進めると、ある一点で全てその相手に感謝の念が湧いてくるという体験をした。

文字にして記すと、ただこれだけの経験なのであるが、この時の感情といいうか内側から湧いてくるものは文字にしては正確には再現できない。書いてしまえば「あらゆるものに感謝の念が湧き出てきた」とか「全てのものはつながっていると実感した」とか「両親がいかに自分を大事に育ててくれたかが心底、分かった」といいうような平板な表現になってしまうのであるが、これは経験しない

と分からないもので理性的に理解できるものはない。本稿でもこれ以上は言葉による表現に限界を感じるのでこの程度の表現にとどめておくことにするが、それはそれまでに一度も感じたことのない感情（感覚）であった。

それ以来、筆者自身も自分なりに真我というものの存在を意識して生きていたので、稲盛が真我のことを話していることを初めて知った時には驚いた。そして、長く稲盛はどこで真我を知り、真我の体験をしたのかと考えているのだが、はっきりとした手がかりはつかめなかった。稲盛の著書では直接、稲盛が真我をいつ体感したのかということについては一切、言及してはいないからである。後になって筆者が経験した心の学校での講座を稲盛が京セラの本社で佐藤康之氏によって体験したことがあることも、筆者はその「心の学校」アイジーエーの主催者の発行している冊子によって知った。そして、このことから、具体的に真我という心（意識）については説明していない稲盛が少なくとも（他の経験を先にしていたのかもしれないが）その一つは「心の学校アイジーエー」で体感していたことまでは分かった。

ちなみに佐藤康之氏の主催する「心の学校アイジーエー」のウェブサイトでは真我を下記のように説明している。佐藤氏によれば、真我とは、「人間の意識の次元の最高次元」、「悟りの極地」、「仏教という解脱の世界」、「宇宙意識」、「神意識」、「仏心」、「完全調和」、「無限の愛」、「真如」、「実相」、「真我とは、宇宙心であり、無限の調和の愛のエネルギーである」、「真我とは、このパラレルワールドの無限のチャンネルの世界を最高地点のチャンネルに変えるチャンネルである。そのパラレルワールドの世界を一変させることができる」、「真我とは、無限宇宙フィールドである」、真我とは、過去と今と未来を同時に変えることができる」、「真我とは、過去に生きてきたご先祖様たちを、時空を超えて救うことができる」、「真我とは、神、仏心、宇宙の心である」とされる。

いきなりこれらの文言を読むと精神世界に全く関心のない人は何のことかが分からないだけでなく、おそらく大半の人が「オカルト」や「怪しい宗教」なのではないかといったマイナスのイメージを抱くであろう。多くの人がそのような反応をすることは、容易に想像がつく。だが、佐藤氏もこのような説明をして既存の宗教で使われる言葉をもって説明するしかできないので、このような説明をしているのだろう。またこれらの表現は稲盛が『京セラフィロソフィ』などの著作の中で使用している言葉とも重なる。だが、稲盛もこの真我を言葉で表現することには困難を感じているのであろう。

先ほども述べたが筆者自身は真我開発の体験を一度はしているので、このように言葉では表現のしようのない意識レベルが人間に存在することを認めるものであるが、この真我という心の領域（というべきか）を言葉で説明することは、非常に困難なことである。この真我の体感（体験）自体は文字化することは困難なのでこれ以上は言及しないが、人間の心は顕在意識、潜在意識のもう一つ奥に誰でもが持っている意識があるということは実は気づいている人は気づいていることだと思われる。そして、この真我の存在を前提とすれば顕在意識は唯識思想でいえば六識（の中の意識）、潜在意識は末那識（深層心の中の自我執着心）、真我が阿頼耶識ということが出来るかもしれない。

稲盛においては、稲盛のいうところの宇宙と共鳴する意識、最初の章で稲盛の発言を確認した「愛と誠と調和」が人間の本質というのが、この真我を指しているということくらいまでは間違いないであろう。「愛と誠と調和」の説明の中では具体的に真我の説明は出てこないのだが、人間の心の深層部には真我があるとともに宇宙とつながっているので、真我の存在に目覚めれば宇宙と共鳴していけるということを稲盛は説きたいのだと推測される。

ただ稲盛はこの佐藤氏の主催する心の学校アイジーエーでのセミナーで真我を初めて体験したのか、そうではなく自らも臨済宗の禅僧である稲盛は座禅体験などで先に真我の体験をしていて、さらに話を聞いて佐藤氏の「心の学校」でも真我の体験をしたのかどうかまでは分からない。稲盛は座禅だけでなくヨガの修行（瞑想）をしているようでもあるので、これは推測だが、稲盛は座禅体験またはヨガの瞑想によって先に真我（と思われるもの）を実際に経験し、さらに後に人から話を聞いて佐藤氏の講座を受けた可能性もある。

潜在意識までは何とか言葉で説明できるのはなぜか。これは先にも触れたが潜在意識までなら、誰でも通常、顕在意識を少し掘ればでてくるからである。馴染み深いところであれば苦手意識などというものは全て潜在意識から来ている。トラウマも潜在意識が顕在意識に影響を与えるものである。トラウマは日本語では心的外傷と訳されるが、心（潜在意識）についた傷が顕在意識に大きな影響を及ぼす。逆に得意なものに対する自信なども潜在意識がすぐに顕在意識につながっているので人間は意識しやすい。それに比べて自分の真我は日常的には意識できない。

真我は体感したことのない人には理解できないので、ここでは唯識思想による阿頼耶識と同じものだと理解すれば良いと説明をしようとも考えてみたが、よくよく考えてみれば、この阿頼耶識も実際には認識できるものではない。この場合も我々は末那識までは少し意識を掘れば認識できる。なぜなら末那識は潜在心（深層心）の中の自我執着心であるから、少し自分の心を深く掘って反省すれば、誰でも到達することができるからである。自分で日ごろは気が付かないが、深く自身の心を掘れば、何人も気づくことのできる自分の中に潜む利己心は唯識でいう末那識である。

だが、阿頼耶識は本で読んでも「人間には阿頼耶識というレベルの意識があるのだな」という理解まではできても、それを実感（体感）することはなかなか難しい。もちろん、唯識思想について意識して修練をつめば、阿頼耶識に達することのできる方法もあるのではあろう。これは筆者が阿頼耶識からの声を聞くという経験していないので、「そういう修行の方法があるのではあろう」としか言いようがないのだが、あるのだらうということまでは何とか推測できるものである。

本稿においては、人間の心の最深部には唯識思想でいうところの阿頼耶識（または別の言い方でいう真我と呼びならわされるもの）があって、稲盛はそのような心の最深部にあるものを意識しながら、人々にもその存在からの声に耳を傾けることの重要性を説いているということを確認することまでとどめておこう。

## おわりに

以上、本稿では稲盛の潜在意識と「心の多重構造」観についての考え方を考察した。本稿で見た

ように稲盛は自分自身で極めてオリジナルな「心観」ともいえる心の多重構造についての説を公に発表している。この多重構造も5つの構造としているものと7つの構造としているものがあり

(『生き方』では5重構造とされているが、『経営12カ条』では7重構造)、どこかの時点でどちらかを最終的な自身の考え方に決めたとの記述はどこにも見つけることはできない。本稿で指摘したように稲盛の「心観」は極めてオリジナリティのあるものである。だが、これは実際のところ決して学問的なものということとはできないし、つぶさに検討すれば疑問の余地の多いものでもある。

本稿では筆者の感じる疑問について考察した。稲盛の示す人間の心の多重構造についての見解もこれまでの宗教による心の多重構造についての説明とも異なるものであるが、本稿では唯識思想との比較を試みた。稲盛が心を何よりも重視する経営者であることは論をまたない。また潜在意識の重要性を極めて強く説くことも本稿で確認した通りである。そこまでは十分に理解できる。稲盛の場合は心に描いたことが実現するまでにもかなり長い時間軸でものを考えているために、実際には証明のしようのないことであっても、30年くらいの時間軸で語られると何となくそのようなものと受け止めることもできる。

だが実際は筆者が別の論稿ですでに論じたように、これには一定の条件のあることも一方では念頭においておく必要もあるだろう。一定の条件とは政治的に自由民主主義体制が確立され、さらには内面の自由が保障された社会でなければ、この潜在意識論も通用するものではないということである。稲盛の著作ではこの条件について触れられることはほとんどない。あたかも自明の理のように潜在意識論が説かれるが、ここは注意の必要な部分であろう。

また稲盛は著書の中では特に断りもなく万人の人生全体に通用する真理としてこの潜在意識の重要性を説いているという感じがする。だが、これはより自分の意思で切り開くことのできる範囲の多い実業家や経営者には当てはまりやすいが、価値観をめぐる闘争をする政治の世界で当てはまらない部分もあるだろう。

我々が稲盛の潜在意識論に学ぶときには、潜在意識に透徹するまで願い続けることによって、物事の叶い易い分野とそうではない分野のあることも念頭に入れておく必要もあるのではないだろうか。発明や新製品の開発、研究、実業（ビジネス）の拡大などある程度までは一人で進めることが出来る領域と社会全体に関わる問題であり価値をめぐる闘争である政治の世界の問題とでは同じ「潜在意識に透徹するまで願えば叶う」という信念を持つ場合であっても別の視点でも物事を考える必要があるだろう。相手のいる世界とある程度までは自分で物事を進められる世界では一概に「願えば叶う」といってもその「叶う」可能性には大きな違いがある。また「願望が叶うか叶わないかは思いの強さによるなど」という説明では説明しきれない現実があることは少し考えてみれば誰でも理解できることである。

稲盛は潜在意識の重要性を説く部分とは別に心の多重構造についての見解を示し低次元の自我を抑えることの重要性も説く。このこと自体は日常的にも各々の人間が自分の心を観察すれば理解できることであるので、多くの人に理解され受け入れられやすい内容のことだと思われる。人間誰しも同じ人物の内部に利己的で低次元の自我とその心を克服しようとする高次元の心も同時に内在して

いるからである。

そして、低次元の自我を克服している人ほどいわゆる人格者であり、また指導者として相応しい人格を有する人物だということはある程度までは普遍的にいうこともできるであろう。低次元の自我つまり唯識思想でいう末那識から発する意識で生きている人間は利己的であるゆえに唯識思想の言葉を借りるならば末那識よりも深い阿頼耶識からの声に耳を傾けなければならない。日常生活において阿頼耶識を意識して生きている人はそう多くはないと思われるが、潜在意識の中に2つの領域があるということは、普通の人々でも意識さえすればある程度までは実感することはできるであろう。稲盛が実際に説きたかったことはこのようなことではなかったのかと考えられる。

だが本稿で指摘した稲盛の心の多重構造についての見解については、その「知性」や「感情」の定義の部分や心の構造を何重にするのが適切なのかという問題を含めていくらかの点でもう少し慎重に検討する余地があると思われる。実際の人間の持つ「知性」や「感情」というものについて稲盛は極めて限定的に定義づけて使っているということは指摘せざるを得ないからである。本稿では率直にこのことを指摘したが、この問題についてはこの先は読者の判断に委ねたい。

#### 【参考文献】

- 稲盛和夫『君の思いは必ず実現する』財界研究所・2004年  
 稲盛和夫『生き方一人間として一番大切なこと』サンマーク出版・2004年  
 稲盛和夫『京セラ 経営12ヵ条』京セラ株式会社 環境・教育本部・2005年  
 稲盛和夫『人生の王道—西郷南洲の教えに学ぶ—』日経BP社・2007年  
 稲盛和夫『働き方—「なぜ働くのか」「いかに働くのか」—』三笠書房・2009年  
 稲盛和夫『京セラフィロソフィ』サンマーク出版・2014年  
 佐藤康之『過去は自由に変えられる マジックミラーの法則』産経新聞・2015年  
 佐藤康之『満月の法則』サンマーク出版・2016年  
 佐藤康之『過去を変えれば「うつ」は治る』廣済堂出版・2017年  
 佐藤康之『真我』アイジーエー出版・2018年  
 佐藤康之『現在(いま)に目覚めれば過去も未来も変えられる』産経新聞出版・2019年  
 多川俊映『唯識とはなにか—唯識三十頌を読む—』角川ソフィア文庫・2014年  
 横山紘一『唯識の思想』講談社学術文庫・2016年  
 横山紘一『阿頼耶識の発見—よくわかる唯識入門—』幻冬舎新書・2011年